（『国語学』174集　1993・9・30）

ウとダロウの職能分化史

佐伯哲夫

キーワード：近代文法史・意志系・推量系・承接形態の推移・国定読本

要　旨

明治以降の、ウ群が意志へ、ダラウ群が推量へという職能分化の推移事象を考察するために、資料として国定読本を取り上げる。

国定読本の第一期から第六期へかけては、「う・よう」の意志系が漸増し、推量系が漸減してきている。

ウ群の承接形態別数は各期あまり変化がないが、今日の書きことばに用いられていない形態は、国定読本でもあまり用いられていない。

推量のウ群は後々まで文中に残り、文末のそれは徐々にダラウ群に替っていった。

また、推量のウ群は、それと類義で対をなすダラウ群に替っていったが、主な交替を年代順に挙げれば「動詞＋う→動詞＋だらう」「動詞＋ませ＋う→動詞＋でせう」、やや遅れて「形容詞＋う→形容詞＋だらう」になる。そして、ウ群と交替できない独自のダラウ群も使用率をわずかながら高めてきている。

結局、ウ群とダラウ群の職能分化は、ウ群のダラウ群への交替を柱に、独自のダラウ群の漸増を加えた事象として把えることができる。

一　今日のウとダロウ

助動詞「む」から「う」への語形変化は平安末に、また「よう」の発生は室町末に遡るようだが、それはさて措き、今日「う」「よう」が意志系の意味職能を担うのに対し、「だろう」「でしょう」が推量系の意味職能を担うことについては、おおむね常識になっている。[注1]いま高畑勲（昭一〇生）のアニメーションーシナリオ「おもひでぽろぽろ」（『'91年鑑代表シナリオ集』シナリオ作家協会編、平四、所収）を取上げ、その辺のところを確かめてみる。

〈意志系〉と認定したもの

①意志（一人称者の）「バナナたべよっと」

②勧誘（一人称者が二人称者を取込んで）「あっそっ、行きましょ〔う〕、お母さん」

③行為状態実現の直前（人称不問）　キヨ子、立って行こう〔と〕する。（ト書き）

④意志・勧誘的疑問・質問「そろそろ帰りましょう〔が〕」（「が」は「か」

の方言表記）

〈推量系〉と認定したもの

⑤推量（一人称者の、人称者不問を対象に）「（略）信じられないでしょうけどね」

⑥同意要求（一人称者の二人称者に対する）ベニバナって珍しいでしょ（う）。

⑦詠嘆（一人称者の自分めあて、量的）『あたしでよかったら』、いつか見た映画のように、素直にそう言えたらどんなにいいだろう。

⑧推量的疑問・質問（一人称者の、自分または二人称者めあて）「でもどうして小学校5年生なのだろう……」

これはおおむね話しことばで、ここには書きことばのト書きをわずかに含むが、結果は表1のとおりである。なお、ここでは①のように「う」が促音に変わったり、②や⑥のように「う」が脱落したりしていると認められるものも数えている。空欄は各項ゼロである。以下同じ。

この表に見るかぎり、作られたものではあるが、話しことばでは「う」「よう」を意志系、「だろう」「でしょう」を推量系と見てよさそうに思う。もっとも、話しことばと書きことばとでは、またジャンルによっても違いがあるように思う。

そこで今度は、書きことばの論説として、「朝日新聞」の「社説」平成四年一〇月分（休刊日1）を対象に、同様のことを調べてみた。その結果を表2に示す。ただし、見出しのそれは数えていない。

先の表1と違って、この表からは「あろう」（「あるだろう」の意）「なろう」（「なるだろう」の意）「言えよう」「なかろう」のように、「う」「よう」を単独で推量に用いた例を、二九例（三〇・二%）も見いだすことができる。

具体例の一部を示せば次のようである。例文の後のカッコ内は月日。

（動＋う　七例）あろう　六　なろう　一

（表1）　高畑勲「おもひでぽろぽろ」

（『'91年鑑代表シナリオ集』シナリオ作家協会編，平4）

	意志	勧誘	実現の直前	意志・勧誘的疑問・質問		推量	同意要求	詠嘆	推量的疑問・質問		計
（う）	2	8	5	3	(18)						18
よ（う）	2	0	2	1	(5)						5
だろ（う）						4	0	1	6	(11)	11
でしょ（う）						1	41	0	2	(44)	44
計	4	8	7	4	(23)	5	41	1	8	(55)	78

う・よう（意志系　23－100%）（推量系　0－0%）

（表2）　朝日新聞の「社説」（平成4年10月分、休刊日1）

	意志	勧誘	実現の直前	仮想		推量	仮想	詠嘆	推量的疑問・質問		計
う	14	1	10	0	(25)	13			2	(15)	40
よう	20	2	17	3	(42)	13	1			(14)	56
だろう						67	1	1	33	(102)	102
であろう						14	0	0	0	(14)	14
でしょう						2	0	0	0	(2)	2
計	34	3	27	3	(67)	109	2	1	35	(147)	214

う・よう（意志系 67—69.8%）（推量系 29—30.2%）

⑨政治的な困難はあろうが、（一〇・一）
〔形＋う　五例〕なかろう　二　安かろう　一　悪かろう　一　多かろう　一
⑩米国や旧ソ連の余剰プルトニウムを含めた国際的な管理体制の整備を急ぐ必要があるのではなかろうか。（一〇・二四）
〔助動＋う　三例〕たろう　三
⑪政治改革を加速させるなど決意を示す方法もあったろう。（一〇・一六）
〔動＋よう　八例〕いえよう　五　できよう　一　すぎよう　一　直面しよう　一
⑫こうした手法での司法審査そのものは、やむをえないものといえよう。（一〇・三〇）
〔助動＋よう　六例〕（ら）れよう　六
⑬これらの勢力に比べれば、市民同盟は中道派に位置づけられよう。（一〇・一九）

また、「だろう」より一層書きことば的な形の「であろう」や丁寧体の「でしょう」がみつかる。

要するに、話し言葉に見られない「う」単独の推量用法が書き言葉には今日なお相当量見られるということである。

だが「う・よう」が意志系へ、「だろう・でしょう」等が推量系へという職能分化は、明治以降今日に至るまで続いているように思われる。

二　国定読本に見るウとダロウの分化

そこで、次に国立国語研究所編『国定読本用語総覧　1〜7』（昭六〇〜平四、続刊中）および、その後を埋めるための、海後宗臣編『日本教科書大系　近代編　第八〜九巻　国語（五）（六）』（昭三九）を資料として取り上げる。国定（国語）読本を取り上げるのは、これが各時代の国語の規範的役割の一つを果してきたと考えるからである。[注2]

表3には「う・よう」の系列別百分率とその用例数を、表4には推量系の「う・よう」群と「だらう・であらう・でせう・でありませう・でございませう」群とに分けて百分率・用例数を示した。表中の各期読本についてあらかじめ説明を加えれば、次のようである。

第一期（明治三七年から使用、俗称イエスシ読本）
第二期（明治四三年から使用、ハタタコ読本）
第三期（大正七年から使用、ハナハト読本）
第四期（昭和八年から使用、サクラ読本）
第五期（昭和一六年から使用、アサヒ読本、戦後、削除修正された教材がある）
第六期（昭和二二年から二四年まで使用、みんないいこ読本）
同（昭和二四年、検定移行への模範として作製また使用、ことさんはなこさん）

（表3）　国定読本におけるウ・ヨウの系列別百分率（カッコ内は例数）

	意志系	推量系	計
第1期	77.1（ 54）	22.9（16）	（ 70）
第2期	78.3（ 65）	21.7（18）	（ 83）
第3期	76.0（133）	24.0（42）	（175）
第4期	79.9（259）	20.1（65）	（324）
第5期	88.8（294）	11.2（37）	（331）
第6期	92.6（410）	7.4（33）	（443）
同（昭24）	100.0（ 63）	0.0（ 0）	（ 63）

注：第5期『コトバノオケイコ』『ことばのおけいこ』は省く

したがって、これは明治以降今日までの中期、五〇年間弱の考察ということになる。

この表3に見るかぎり、第三期（大七より使用）につまづきがあるものの、「う・よう」単独での意志系百分率は漸増し、それに伴って推量系の方は漸減している。

また、表4に見ると、推量系の意味を示すのに、こちらは第三ないしは四期につまづきがあるものの、「う・よう」単独での百分率は漸減し、それに伴ってその複合形「だらう・であらう・でせう・でありませう・でございませう」の百分率は漸増してきている。

ここで一つ注意しておけば、昭和二四年刊の『まことさんはなこさん』『いなかのいちにち』『いさむさんのうち』は以後の検定教科書の模範として、ただし一年生用として作られたもので、民主化の線に沿った、社会性重視の教科書になっている。

表5は右三教科書におけるそれをそれ以前の表にならって示したものである。

『まことさんはなこさん』に勧誘の「う」が多く、話し言葉的な「でしょう」の多いのはこの社会性重視の事情に根ざしていると思われる。

が、ともあれ右の諸表には単独形の「う・よう」群が意志を担い、「だらう・であらう・でせう・でございませう」群が推量を担うという方向への職能分化が見られる。

そこで、これを国定読本に限定し、まず、推量の職能を担う「う・よう」群（＝ウ群）と「だらう・であらう・でせう・でございませう」群（＝ダラウ群）がそれぞれ、いつどのような承接形態を取捨してきたのか、それはどんな理由によるのかなど、以下その辺の事情を考察していくことにする。[注3]

なお、「であらう・でせう・でありませう・でございませう」等を同じダラウ群に含めるのは、これらが等しく、

ア　推量を基本的意義として持っていること

イ　名詞・状名詞（＝形容動詞語幹）のみならず形容詞・動詞にも後接可能という外的職能を持っていること[注4]による。

「だらう・でせう」の「だら・でせ」を断定の助動詞「だ・です」と別扱いにするのも、この外的職能の違いによる。

（表4）　推量系の語群別百分率（カッコ内は例数）

	う・よう	だらう・であらう・でせう 他	計
第1期	37.2 (16)	62.8 (27)	(43)
第2期	29.5 (18)	70.5 (43)	(61)
第3期	21.8 (42)	78.2 (151 除意志 1)	(193)
第4期	25.1 (65)	74.9 (194)	(259)
第5期	15.0 (37)	85.0 (209)	(246)
第6期	8.1 (33)	91.9 (372)	(405)
同(昭24)	0.0 (0)	100.0 (24)	(24)

（表5）　まことさんはなこさん

（第6期のうち昭24版、検定移行への模範として、また使用）

	意志	勧誘	勧誘同意	質疑意		推量	同意要求	質疑推		計
う	5	39	7	4	(55)					55
よう	5	1	0	2	(8)					8
だろう						0	0	2	(2)	2
でしょう						12	4	6	(22)	22
計	10	40	7	6	(63)	12	4	8	(24)	87

う・よう（意志系　63——100%　推量系　0——0%）

三―一―一　推量ウにおける承接形態別数の推移

第一期（明三七から使用）に現れる推量系の「う」一六例（「よう」無）はすべて「ます」の未然形「ませ」に後接しており、意味は推量、反語、同意要求、質疑にわたる。ここで丁寧体を普通体に変えた場合のことを考えて前接する動詞を行為動詞（その文脈でおおむね受動態可）と状態動詞（おおむね受動態否）に分けてみた。結果は次のようである。

行為動詞＋ませ＋う　四
同＋補助動詞＋ませ＋う　一
状態動詞＋ませ＋う　一一
計　一六

状態動詞が断然多いが、行為動詞の場合と状態動詞の場合の例を一つずつ挙げてみる。

⑭汽車は、ここで、とまりませうか。（「行為動詞＋ませ」に後接）
⑮タローハキット、カシコイヒトニナリマセウ。（「状態動詞＋マセ」に後接）

今なら、それぞれ「とまるでしょうか」「ナルデショウ」になりそうなところである。

ちなみに、「行為動詞＋ませ＋う」の「う」は、文脈の支えがなければ意志系の解釈可能だが、「状態動詞＋ませ＋う」の「う」は意志系の解釈を受ける可能性（推量か意志かのまぎれ）がゼロに近い。推量系に「状態動詞＋ませ＋う」の多い理由の一つはこの辺にあると思われる。

なお、「行為動詞＋補助動詞＋ませ＋う」の一例は「書いてありませう」で、以降この類における「ませ」は状態動詞相当に後接しているとして処理する。

そこで、推量系の「う・よう」に前接する語句を加え、期別に整理してみた。結果を表6に示すが、承接形態は受け部[注5]に限って挙げる。そして、それは動詞（必要あれば行為と状態に分ける）、形容詞、状名詞、名詞から「う・よう」までとし、以降の助詞類は切り捨てる。

また、この表では、期別に承接形態別の例数を示したが、参考のために朝日新聞の社説の分（先の表2）を整理して加えた。

この表で見ると承接形態数は、

第一期（明三七）　二形態

（表6）　推量ウ・ヨウの承接形態と例数

承接形態＼期	I	II	III	IV	V	VI	計	社説
行為動詞＋ませ＋う	4	1	4				9	
状態動詞＋ませ＋う	12	10	20	12	6	4	64	
行為動詞＋う		1	1				2	
状態動詞＋う		1	6	24	9	16	56	15
行為動詞＋れ＋よう					1	1	2	6
行為動詞＋れ＋ませ＋う		2	1				3	
行為動詞＋れ＋補動＋う				2	1		3	
状態動詞＋なから＋う						1	1	
形容詞＋う		3	5	16	13	5	42	5
行為動詞＋たら＋う			1			2	3	
状態動詞＋たら＋う			1	3		3	7	2
行為動詞＋まし＋たら＋う			1				1	
形容詞＋たら＋う			1	2	2		5	1
状名詞＋だつ＋たら＋う						1	1	
名詞＋だつ＋たら＋う			1	1			2	
名詞＋であつ＋たら＋う				5	5		10	
計	16	18	42	65	37	33	211	29

注：動詞は「動＋補動」を含み、名詞は形式名詞を含む
「れ」は「られ」を、「う」は「よう」を含む

第二期（明四三）　六〃
第三期（大七）　一一〃

と増えてきている。第三期にはじめて現れた五形態はいずれも「〜たら＋う」、すなわち「う」の「た」への後接形である。だが、この第三期の一一形態を峠として、以降は、

第四期（昭八）　八形態
第五期（昭一六）　七〃
第六期（昭二二）　八〃

と低下低迷している。

なお、第六期でも「昭二四版」には、表3、表4、表5に見るように「う・よう」の推量系がない。といって、ここで推量系の「う・よう」が無くなったわけではない。

今日の社説（平四）　五形態

と残ってはいる。だが、資料の量の大小を無視して言えば、国定読本の四・五・六期に比べ、減少傾向にある。そして、この傾向は、普通体の承接形態に限っても、

第一期　零形態
第二期　三〃
第三期　七〃
第四期　七〃
第五期　六〃
第六期　七〃
社説　五〃

とほぼ同様に見られるのである。

ちなみに、普通体の承接形態のうち国定読本にあって今日の社説にないものを挙げれば、次のようである。ローマ数字は期数を示す。

〔行為動詞＋う〕　二例
⑯へいけ方はがけの上から、てきの軍ぜいが攻めこまうとはゆめにも思はない。（II）
〔行為動詞＋れ＋補動＋う〕　三例
⑰わたしが、ここで、こんなにしかられてゐようなどとは、（IV）
〔状態動詞＋なから＋う〕　一例
⑱地にはあらそいがたえなかろうが、[注6]（VI）
〔行為動詞＋たら＋う〕　三例
⑲おい、みんな、聞いたろう。（VI）
〔状名詞＋だつ＋たら＋う〕　一例
⑳あの文章は、ずいぶんへただったろう。（VI）
〔名詞＋だつ＋たら＋う〕　二例
㉑それ程の手がらだったらうか。（IV）
〔名詞＋であつ＋たら＋う〕　一〇例
㉒阿礼は、それこそ天にものぼるここちであつたらう。（V）

こうしてみると、今日の社説にない形態は、国定読本においてあまり用いられなかったものと言ってよさそうである。ただし、その中にあって最後の「名詞＋であつ＋たら＋う」は一〇例とかなり多く用いられているが、これは用例が第四、五期に集中していて、第六期（戦後）にはない。これを含めて「〜たら＋う」は、読本には遅れて現れ、やがて減少傾向に転じた承接形態かもしれない。

三―一―二　文中における推量ウ・ヨウ

ところで、推量ウ（・ヨウ）は第一期の場合、

㉓イマニ、ボクラヨリ、ズット、タカクナリマセウ。（I）

のように文末に、一六例のすべてが位置している。

だが、第二期以降になると、

㉔てきの軍ぜいが攻めこまうとはゆめにも思はない。（II）

のような文中使用例が見いだせる。

そこで、次のことを調べてみる。

a　期別に、推量ウ・ヨウの位置を文末と文中に分け、各例数と文中百分率（文末・文中の全推量ウ・ヨウに対する）

b　文中のウ・ヨウについては三分して、

ア　例㉔のように格助詞「と」の前にあるもの＝終止形と見なしうる

イ　次の例のように接続助詞「が」の前にあるもの＝準終止形

㉕其の原因はいろ〳〵あらうが、（III）

ウ　次の例のように形式名詞の前にあるもの＝連体形

㉖ねらいのはずれようはずはありません。（VI）

結果は表7のようである。この表の、特に文中に位置する例の百分率を見ると、次のことがわかる。

推量ウ・ヨウは、第五期につまずきがあるが、おおむね期を追って、文末における使用が減り、文中におけるそれが増えてきている。ちなみに、ダラウ系の方の文中例数と全ダラウ系例数（表4参照）に対するその比率は次のようである。

I　二（七・四%）　II　一（二・三%）　III　二一（一三・八%）　IV　二五（一二・九%）　V　二三（一一・〇%）　VI　三八（一〇・二%）

百分率を見ると、第一期から第二期にかけては、低レベルのままに減り、第三期から第六期にかけては、高レベルでやはり減ってきている。

つまり、推量ウ群のうち文中のそれは、総じて後々まで残り、文末のそれは、徐々にではあるが、ダラウ群にとって替られてきた、ということになる。これは、ウ群に比べ、ダラウ群は語感的に重い、文中には重すぎる、意志系と誤解されるおそれがなければウ群のままで、という意識が働くからかと見られる。

三―二　〈ウ対ダラウ〉の組と例数比率の推移

そこで今度は「〜う・ませう」のうち推量系の意味を担うものと、それに対応する「〜だらう・であらう・でせう」を組として、その組ごとに、また期別に、それぞれの例数がどのように変ってきているかを調べてみた。その結果が表8であるが、この表では「行為動詞＋う」を「行為動詞＋だらう」にも「行為動詞＋であらう」にも対応するとして、それがわかるように示した。空欄はすべて〈0―0〉である。また、計の欄のカッコ内には期別にダラウ群の、推量「ウ群＋ダラウ群」に対

（表7）　推量ウ・ヨウの出現位置

期		I	II	III	IV	V	VI	計	社説
文末（%）		16 (100)	15 (83.3)	32 (76.2)	45 (69.2)	29 (78.4)	21 (66.7)	158	25 (86.2)
文中	と		2	5	16	6	5	34	2
	が		1	4	2	2	4	13	2
	はず			1	2		3	6	
	計（%）	0 (0)	3 (16.7)	10 (23.8)	20 (30.8)	8 (21.6)	12 (33.3)	69	4 (13.8)
総計		16	18	42	65	37	33	211	29

注：と＝引用（仮想の「とは」「とも」を含む）
　　が＝接続助詞　はず＝ほかに多く形式名詞

(表 8)　〈ウ対ダラウ〉の組と期別例数

〈ウ群―ダラウ群〉の組	第 1 期	第 2 期	第 3 期	第 4 期	第 5 期	第 6 期	付
行為動詞＋う｛行為動詞＋だらう	0	1	1	0	0	0	
行為動詞＋う｛行為動詞＋であらう	1	0	0	0	2	7	
行為動詞＋れ＋よう｛行為動詞＋れる＋だらう					1	1	
行為動詞＋れ＋よう｛行為動詞＋れる＋であらう					0	0	
行為動詞＋れ＋補動＋う｛行為動詞＋れ＋補動＋だらう				2	1		
行為動詞＋れ＋補動＋う｛行為動詞＋れ＋補動＋であらう				0	0		
行為動詞＋たら＋う｛行為動詞＋た＋だらう			1			2	
行為動詞＋たら＋う｛行為動詞＋た＋であらう			0			0	
行為動詞＋れ＋たら＋う－行為動詞＋れ＋た＋であらう			0－1				
行為動詞＋ませ＋う－行為動詞＋でせう	4－0	1－0	4－0	0－1	0－3	0－7	
行為動詞＋れ＋ませ＋う－行為動詞＋れる＋でせう		2－0	1－0	0－1	0－2	0－3	
行為動詞＋まし＋たら＋う｛行為動詞＋た＋でせう	0	0	1	0		0	
行為動詞＋まし＋たら＋う｛行為動詞＋まし＋た＋でせう	1	1	0	1		4	
行為動詞＋れ＋まし＋たら＋う－行為動詞＋れ＋た＋でせう	0－2						
行為動詞＋ません＋でし＋たら＋う－行為動詞＋なかつ＋た＋でせう				0－1	0－1		
小　計	4－4	4－1	8－4	2－5	2－9	3－21	
状態動詞＋う｛状態動詞＋だらう	0	1	6	24	9	16	
状態動詞＋う｛状態動詞＋であらう	2	1	16	16	12	32	
状態動詞＋れ＋よう｛状態動詞＋れる＋だらう	1	1	6	8	11	3	
状態動詞＋れ＋よう｛状態動詞＋れる＋であらう					0		
状態動詞＋なから＋う｛状態動詞＋ない＋だらう					1		
状態動詞＋なから＋う｛状態動詞＋ない＋であらう			0	0	0	1	
状態動詞＋たら＋う｛状態動詞＋た＋だらう			1	1	5	4	
状態動詞＋たら＋う｛状態動詞＋た＋であらう		0	2	3	1	0	
状態動詞＋ませ＋う－状態動詞＋でせう	12－2	1	0	1	0	3	
状態動詞＋ませ＋う－状態動詞＋でせう		0	1	0	1	1	
状態動詞＋まし＋たら＋う｛状態動詞＋た＋でせう	12－0	10－0	20－4	12－20	6－27	4－45	0－1
状態動詞＋まし＋たら＋う｛状態動詞＋まし＋た＋でせう	0			0	0		0
状態動詞＋れ＋まし＋たら＋う－状態動詞＋れ＋た＋でせう	1			2	3		1
状態動詞＋ません＋でし＋たら＋う－状態動詞＋なかつ＋た＋でせう	0			0	0		0
				0－1	0－1		
小　計	12-6	11-3	27-30	39-50	15-63	24-86	0-2
形容詞＋う｛形容詞＋だらう		3	5	16	13	5	
形容詞＋う｛形容詞＋であらう		0	3	0	2	9	
形容詞＋たら＋う｛形容詞＋た＋だらう			1	1	1	0	
形容詞＋たら＋う｛形容詞＋た＋であらう			0	0	0	0	
状名詞＋だつ＋たら＋う｛状名詞＋だつ＋た＋だらう						1	
状名詞＋だつ＋たら＋う｛状名詞＋だつ＋た＋であらう						0	
状名詞＋でし＋たら＋う－状名詞＋だつ＋た＋でせう						0－1	
名詞＋だつ＋たら＋う｛名詞＋だつ＋た＋だらう			1	1			
名詞＋だつ＋たら＋う｛名詞＋だつ＋た＋であらう			0	0			
名詞＋であつ＋たら＋う｛名詞＋であつ＋た＋だらう				5	5		
名詞＋であつ＋たら＋う｛名詞＋であつ＋た＋であらう				0	0		
名詞＋でし＋たら＋う｛名詞＋だつ＋た＋でせう						0	
名詞＋でし＋たら＋う｛名詞＋でし＋た＋でせう						2	
名詞＋であり＋まし＋たら＋う－名詞＋であつ＋た＋でせう					0－1		
連体詞＋であり＋まし＋たら＋う－連体詞＋であつ＋た＋でせう					0－1	0－1	
小　計		3－0	7－4	24－1	20－5	6－13	
総　計	16－10	18－4	42－38	65－56	37－77	33－120	0－2
(期ごとのダラウ群の%)	(38.5)	(18.2)	(47.5)	(46.3)	(67.5)	(78.4)	―

注：期の右末の「付」は昭和 24 版
　組の中の ～～～ 線は優勢化してきているもの、――は優勢で残っているもの

する百分率を入れた。なお、本稿では、「の（ん）だらう」などを一単位とせず、「（形式）名詞＋だらう」として処理している。

この表から、次のようなことがわかる。

〈1〉 ダラウ群の%欄を期別に見ていくと、減少や停滞もあるが、おおむね期を追ってダラウ群が増加してきている（第一期三八・五%、第六期七八・四%と倍増）。ということは、推量の場合、ウ群は期を追って、それと意味的に対応するダラウ群にとって替られていることになる。

〈2〉 そこで、さらに具体的に、第六期の、仮に5以上の組に限って見ていくと、次のようなことがわかる。[注7]

ア 行為動詞＋う―行為動詞＋だらう

（期別に示せば、I 0―1 II 1―0 III 1―1 IV 0―1 V 0―1 VI 0―7）

第六期に次のようなダラウ群が急増している。

㉗きっとコックスが大声でいうだろう。（VI）

イ 行為動詞＋ませ＋う―行為動詞＋でせう

（I 4―0 II 1―0 III 4―0 IV 0―1 V 0―3 VI 0―7）

第三期まではウ群ばかりだったのに、第四期以降は、逆転して徐々にではあるが、次のようなダラウ群が替って増えてきている。

㉘でも、いまにきっと来るでしょう。（VI）

ウ 状態動詞＋う―状態動詞＋だらう

（I 0―2 II 1―1 III 6―16 IV 24―16 V 9―12 VI 16―32）

第三期以降（特に三、六期）、次のようなダラウ群が優位に立ってきている。

㉙砲兵か騎兵になれるだらう。（III）

が、同時に次のようなウ群もかなり多く使われている。

㉚我が国民の長所・短所を数えたならば、まだ外にもいろいろあらう。（III）

エ 状態動詞＋ませ＋う―状態動詞＋でせう

（I 12―2 II 10―0 III 20―4 IV 12―20 V 6―27 VI 4―45）

傾向的にはイと同様、第三期まではウ群が優位にあるのに、第四期以降は、逆転してダラウ群が次第に多く用いられてきている。双方の例を挙げておく。

㉛アオイタタミヲシイタヤウニナリマセウ。（II）

㉜ねえさん、助るでせうか。（V）

オ 形容詞＋う―形容詞＋だらう

（I 0―0 II 3―0 III 5―3 IV 16―0 V 13―2 VI 5―9）

ここでは特に、第四、第五期においてウ群が多かったのに、第六期に入るとともにダラウ群が逆転するかの傾向を見せてきた。双方の例を挙げておく。

㉝つぎあはせたらよからうと、おかんがへになりました。（IV）

㉞あんな大きな船の船長と、コックスとどっちがむずかしいだろうね。（VI）

以上、動詞を行為動詞と状態動詞に二分して見てきたが、右の傾向はそれぞれ、動詞一つにまとめても変わらない。

期の先後順に整理すれば、

a　第四期（昭八）あたりから「動詞＋だらう」が「動詞＋う」にとって替って多く用いられた（ただし「状態動詞＋う―状態動詞＋だらう」については、すでに第三期に絶対数の逆転が見られる）。

b　第三期までは「動詞＋ませ＋う」が多く用いられていたが、第四期（昭八）以降は次第に「動詞＋でせう」に替っていった。

c　第五期（昭一六）までは「形容詞＋う」が多く用いられてきていたが、第六期（戦後昭二二）に入ると、「形容詞＋だらう」が逆転するかの傾向を見せてきた。

推量系においてダラウ群がウ群にとって替ってきている事象は、不明確な表現をできるだけ避けようとする、役割分化の意図に支えられているのではあるまいか。

それは、先の三―一―一でも触れたが、今、第六期の小計について、残存する推量ウ群の比率を見てもおよそ分かることである。比率を示す。

行為動詞＋～＋う	一二・五％
状態動詞＋～＋う	二一・八％
形容詞ほか＋～＋う	三一・六％

ここでは、残存率の高い形態中のウほど意志系へのまぎれが低いと言える。[注8] ちなみに、「判断」の語を少し拡張して使えば、意志・推量は、それまでの叙述を不定とする判断を共通基盤として持っている。意志と推量は、この点できわめて近いと言える。

三―三　ウ群と交替できないダラウ群の使用増

さて、ダラウ群にはたとえば、

㉟キット、ワタクシタチノウンドーバヲトリニ、キタノダラウ。

（Ⅰ）

のように、推量ウに変えることのできないものがある。これを今、ウ群と交替できないダラウ群として、期別・形態別に例数を調べ、かつ期別の計と百分率を出した。これが次ページの表9である。

これを見ると、この類のダラウ群は、第一期から第三期までは不安定だが、第四期から第六期へかけて、使用率をわずかながら高めてきている。そして、全体的には付（昭二四版）まで入れると、やはり緩やかではあるが、使用率を高めてきているのである。

なお、この種のダラウ群増加の因は、一つに、先の三―二におけるダラウ群増加への類推によることと、二つに、ことに名詞推量のばあい、これがより便利な語法であることによる、と考えられる。

そこで、表8後項すなわち、ウ群と交替できるダラウ群の計と、表9すなわちウ群と交替できないダラウ群の計を合わせ、それの、全推量数に対する百分率を出してみる。結果は戻って表4のようになる。

すなわち、明治以降の、ウ群が意志系へ、ダラウ群が推量系へという職能分化は、おおむね、推量ウ群の、それと意義の上で対応するダラウ群への交替を柱に、ウ群と交替できない独自のダラウ群の緩やかな増加の添った事象として把えることができる。

四　ま　と　め

以上に見てきたところで主だった事柄をまとめておく。

ア　今日、話しことばでは、おおむね「う・よう」が意志系の意味に、「だろう・でしょう」が推量系の意味に用いられる。だが、書

（表9）　ウ群と交替できないダラウ群と期別例数

ダラウ群の形態	第1期	第2期	第3期	第4期	第5期	第6期	付
動詞＋ない＋でせう　*1		1	3	3	5	9	
動詞＋ません＋でせう				1			
動詞＋でございませう					2		
動詞＋た＋でございませう			1				
形容詞＋でせう	1		3	4	11	18	3
形容詞＋た＋でせう				1			2
状名詞＋だらう			1	3	1		
状名詞＋であらう					2	1	
状名詞＋でせう		1	3		3	8	
状名詞＋でございませう	1						
副詞＋だらう		1		2	2	3	
副詞＋でせう			2	6	3	13	
副詞＋でございませう			2				
連体詞＋であつ＋た＋でせう				1			
名詞＋だらう		8	17	34	29	90	
名詞＋であらう		4	39	47	29	18	
名詞＋でせう	15	21	35	31	39	86	17
名詞＋でありませう					2		
名詞＋でございませう		2	5	5	4	3	
〔名詞＋でござらう〕　*2				〔2〕	〔2〕		
カラ(格助)＋だらう			1				
カラ(接助)＋だらう			1				
カラ(同)＋であらう						2	
カラ(同)＋でせう		1				1	
計	17	39	113	138	132	252	22
（期別全推量数に対する%）	(39.5)	(63.9)	(58.5)	(53.4)	(53.9)	(62.2)	(91.7)

注　*1　これに対応するものに「ます＋まい」があるが、ダラウ群とは別とする
　　*2　文語なので計には算出していない
　　～～～～　線は優勢化してきているもの

きことば（新聞社説）では「う・よう」の三〇%が推量系の意味に用いられている。

イ　明治以降の「う・よう」の意志系へ、「だらう・でせう」等の推量系へという職能分化の推移を見るために、資料として国定読本を取り上げた。第一期から第六期（さらにその昭二四版）へかけて〔明治以降今日までの中期五〇年間弱〕「う・よう」の意志系が漸増し、推量系が漸減してきている。また、推量系の意味を示すのに「う・よう」単独での用法が漸減し、その複合形「だらう・であらう・でせう・でありませう」等の用法が漸増してきている。

ウ　「う・よう」の承接形態別の数は各期あまり変化がない。「たら＋う」は第三期（大七）以降に遅れて登場するが、これはやがて減少傾向に転じた形態かと思う。今日の書きことばに用いられていない承接形態は、国定読本でもあまり用いられていない。

エ　推量の「う・よう」は後々まで文中に残り、文末のそれは、徐々にではあるが、ダラウ群にとって替られた。

オ　推量のウ群は、おおむね期を追って、それと類義で対をなすダラウ群にとって替られている。主な交替を年代順に挙げれば、「動詞＋う→動詞＋だらう」「動詞＋ませ＋う→動詞＋でせう」、やや遅れて「形容詞＋う→形容詞＋だらう」である。

カ　ウ群と交替できない独自のダラウ群は、緩慢ではあるが徐々に使用率を高めてきている。

キ　右のイに述べた職能の分化推移は、オを柱に、カの加わった事

象として把えることができる。

注1　中村通夫（一九四八）をはじめ松村明（一九七七）、田中章夫（一九九一）などにも言及がある。

注2　古田東朔（一九八二）ほかを参照。

注3　通時的に、また共時的にまとめる時は「ウ群」「ダラウ群」、標題の「ダロウ」のようにカタカナを用いる。

注4　ただし、内的職能は、語としての結合度と待遇度においてそれぞれに異なる。「状名詞」の呼称は渡辺実（一九七一）に従う。

注5　「係り部」に対するもので、述語から文末・節末までを言う。〈読まーせーられーてしまっーていーそうーでーなかっーたーらしいーぜ〉も一つの受け部である。アスペクトなどを担う補助動詞もここには含まれる。「聞く」の「述語」、「聞かれた」の「述語文節」、「聞かせていたね」の「述語連文節」もすべて「受け部」一つで済ますことが出来て便利である。これに当たるものを「述語」や「述語文節」で呼ぶ研究者もある。似た趣旨のことは佐伯哲夫（一九八三）でも述べた。

注6　資料中では右の一例きりであり、今の私個人の語感に照らせば少し不自然であるが、ともかく存在するということで、これは後の三―二および表8に取り上げる。

注7　ここに扱うものは標本としての性格を備えていないが、一つの目安を得るために、それを仮に備えていると見て比率の検定を行ってみる。以下、傍線を付した数値は危険率5％で有意差の認められるものである。

注8　まぎれ排除のための職能分化ということでは、可能表現における「見れる」「来れる」などの、いわゆる「ら抜き言葉」の方向とも軌を一にするかと思われる。

参考文献

井上敏夫（一九八一）『国語教育史資料二　教科書史』（東京法令出版）

古田東朔（一九七八～続刊中）『小学読本便覧』（全十巻と別巻、武蔵野書院）

＊

国立国語研究所・永野賢（一九五一）『現代語の助詞・助動詞――用法と実例――』（秀英出版）

佐伯哲夫（一九八三）「語順と意味」（『日本語学』十二月号、『現代語の展開』に収録、一九八九、和泉書院）

城田　俊（一九七七）「《う／よう》の基本的意味」（『国語学110』）

田中章夫（一九七一）「う」「よう」「だろう」（松村明編『日本文法大辞典』明治書院）

――（一九九一）『標準語《ことばの小径》』（誠文堂新光社）

外山映次（一九六九）「う・よう（付　だろう）」（松村明編『古典語現代語　助詞助動詞詳説』学燈社）

中村通夫（一九四八）『東京語の性格』（川田書房）

日本大辞典刊行会（一九七三、七五、七六）「う」「よう」「だろう」（『日本国語大辞典』小学館）

古田東朔（一九八二）「現代の文法」（『講座国語史4　文法史』大修館書店）

松村　明（一九五七）『江戸語東京語の研究』（東京堂）

――（一九七七）『近代の国語――江戸から現代へ――』（桜楓社）

宮島達夫（一九六四）「助詞・助動詞の用法」（国立国語研究所『現代雑誌九十種の用語用字(3)　分析』秀英出版）

吉田金彦（一九七二）『現代語助動詞の史的研究』（明治書院）

渡辺　実（一九七一）『国語構文論』（塙書房）

――関西大学教授――

（平成五年三月十八日　受理）
（平成五年六月三十日　改稿受理）